

文は人なり。連載コラムのタイトルにこの言葉を掲げたのは2年前のことだ。その理由をつつとてみたいと思う。フランスの博物学者ビュフォン

の言葉だが、僕なりの解釈はこうだ。自らと向き合いながら一つひとつの言葉を紡いでいくのが文章。言葉を紡ぐ過程で「わたし」というフィルターを通り、自らの思想や価値観が文体をつくり上げていく。書き手がどんな人間であるか、文体はそれを映す鏡となる。だから、美辞麗句や秀逸な言い回しを操っても読み手を欺くことはできない。文章スキルだけではない。文章スキルだけでは

人なり

文は



続続

—4—

先日、「人材育成」をテーマにして書いた論文が僕の手元にやって来た。論文なのに「やって来た」と擬人法を用いたのにはワケがある。受験者本人が論文を持ってくるわけではなく、その家

族や上司が僕の知り合いだという縁で添削を頼まれるケースが数多あるからだ。

今回は政令市の係長試験だったが、「ミスはその場で戒める」という解決策が書いてあった。それを説明する文章を読んだら僕は眉をひそめた。

「情けは人のためならず」とも言う。ミスを目に見るのは、本人のためにもならないのだ」と断じている。実はこの言葉、「情けは人のためならず」というのが正しい表現であり、「人に情けをかける」と、巡り巡って結局は自分のためになる」という意味だ。しかし、彼女は「人に情けをかけると結局はその人のためにならない」という意味で使っていたのだ。解釈が難しい言葉かもしれないが、昇任試験論文での誤用は減点される破目にもなりかねない。

一方で、「気が置けない」というように努める」という解決策でメンターとメンティーとの関係について書いた受験者もいる。これは「気が置けない」と「気が置ける」を全く逆の意味で解釈しているケースだ。4冊の座右の辞書が僕の書齋にあるが、そのうちの1冊を引いてみよう。

「気が置けない」は氣を使わずに気楽につきあえること。「気が置ける」は相手とのあいだに自然に心づかいが置かれる、つまり何かと配慮がいるという意味なのだ。この受験者は「ささいな相談でもしやすいうちに「気が置けない人」になる」ということを主張したかっただろう。使い慣れない言葉で墓穴を掘らないようにしたいものだ。「機運」と「氣運」、
「くろい」と「くらい」も使い分けに迷う人が多

い。「機運」はだんだんとそうなっていく頃合い、時の巡り。「氣運」は自然にそうなっていくきそう

なようす、世のなりゆき。ニュアンスの違いはあれども意味に大差がないので、昇任試験論文では「機運」を用いるように指導している。表記ゆれを起こして、1本の論文で両方を用いているケースもあるが、これは採点官泣かせになるかもしれない。「くろい」と「くらい」も厳格に使い分けする必要はないが、程度の軽重を表現するために「こそあど」に付ける場合は「くろい」を用いるようにし、それ以外ではどちらを使っても構わないだろう。

文の他に手書きで書くことではないかもしれない。パソコンの変換キーを押せばいくつかの候補が提示されて正しいものを

選べばよいし、スマホの辞書機能が充実しているから困らないらしいが、本当にそうだろうか。論文の採点を務めてみると誤字・誤用のオンパレードに遭遇することになる。壁の穴は壁で塞げ。こ

辞書が1冊もない!?